英米文学科同窓会設立25周年記念講演

『フランクリン自伝』と『福翁自伝』
—とくに宗教観をめぐって

講師　梅津 順一氏（青山学院大学名誉教授、青山学院前院長）

国際基督教大学教養学部社会学科卒業。東京大学大学院経済学研究科修了。経済学博士（東京大学）。放送大学、青山学院女子短期大学教養学科、聖学院大学政治経済学部、青山学院大学総合文化政策学部教授、第14代青山学院院長を歴任。

研究テーマは、マックス･ヴェーバーの古典的名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の視点から考察するピューリタニズムおよび経済思想。『ヴェーバーとピューリタニズム』（新教出版社、2010年）など著書多数。

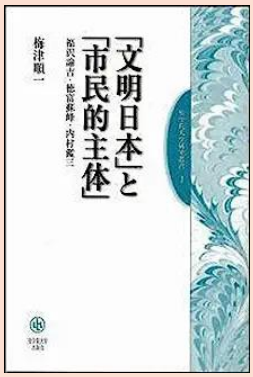
今回の主題に関わる著書として、『近代経済人の宗教的根源』（みすず書房、1989年）、『「文明日本」と「市民的主体」——福澤諭吉･徳富蘇峰･内村鑑三』（聖学院大学出版会、2001年）、『ヴェーバーとフランクリン』（新教出版社、2021年）。最新作として『大学にキリスト教は必要か』（教文館、2022年）。

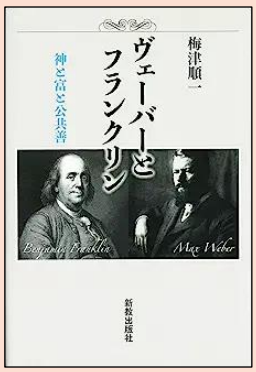
ベンジャミン・フランクリンと福澤諭吉は、それぞれアメリカ建国期の指導者、明治日本の文明化の指導者として有名ですが、それぞれの国民の敬愛の対象になっています。二人とも、庶民に近いところの出身で、ほとんど独学で知識を身に付け、文筆によって多くの読者を得ただけでなく、さまざまな分野で重要な実績を残しました。

フランクリンはペンシルヴェニア・ギャゼットという新聞を発行し、主筆となって健筆を振るいましたが、福澤も時事新報を発行、また福澤屋諭吉という出版社を経営し、旺盛な執筆活動を展開しています。福澤が慶応義塾を設立して教育に従事したのに対し、フランクリンもペンシルヴェニア大学の創立者の一人となりました。興味深いことに、フランクリンはアメリカの100ドル紙幣の肖像となっていますが、福澤も一万円札の肖像となっていることでも似ています。

『フランクリン自伝』と『福翁自伝』が、文学上の古典として多くの読者を獲得している点でも似ているのですが、福澤が自伝を書く上で、『フランクリン自伝』を参照したことはなかったのか、という疑問がしばしば発せられています。初期の福澤は、英語の書物を読みこなして、日本の読者に提供するという形で文筆活動を開始しました。そう考えますと、自伝を書く（語る）上で、フランクリンを参照したことはあり得ないことではありません。両者には並行記事もあります。

講演では、自伝を手掛かりに、二人の比較を通して、アメリカと近代日本を比較してみたいと考えています。また、二人のキリスト教への態度にも言及し、慶応義塾に対する青山学院の意義についても触れてみたい。（講師）





日時：2023年9月23日（土･祝）11:00～12:30
会場：本多記念国際会議場（17号館6階）
参加費：無料（事前申し込み不要）

英米文学科同窓会設立25周年記念懇親会
日時：2023年9月23日（土）13:00～（昼食・茶菓をご用意いたします）
会場：17号館 3階 17306教室
会費：2,000円（事前申し込みの上、当日、懇親会受付に現金でお支払いください）
※申込方法については、同封の「秋の活動予定・申込方法」参照

問合せ先：英米文学科同窓会
E-mail：aogaku.eibun.alumni2020@gmail.com　FAX：03-3409-8975（同窓祭事務局内）